

私立大学理事長が考える トップマネジメントの視点での大学経営とは？

(第 27 回)

学校法人大阪観光大学 山本 健慈 理事長 インタビュー

私立大学経営に関して活発に議論され、私立学校法をはじめとして様々な法律や制度が改正されている中、トップマネジメントを担う学校法人理事長の視点での大学経営についてのお考えを紹介させていただきます。

今回は、大阪観光大学を設置する学校法人大阪観光大学理事長の山本 健慈 先生にお話を伺いました（インタビュアー：兵庫大学 事務局次長 福山 敦 氏）。

● 大学経営について

福山：山本理事長は和歌山大学学長、国立大学協会専務理事を経て、2022 年 4 月から学校法人大阪観光大学理事長に就任されています。国立大学とは異なる私立大学の理事長に就任され、国立大学と私立大学の文化や働き方の違いなど、私立大学経営について感じておられることをご教示願います。

山本理事長：日本には日本特有の大学制度があり、国立大学法人法や私立学校法という制度の下で国立大学や私立大学は括られています。しかし国立大学はそれぞれ文化も意思決定のスタイルも異なるということを経験していますので、例えば私の和歌山大学での成功体験やノウハウが別の大学で通じるという考えで物事に対応したことはありません。ですから私が大阪観光大学の理事長に就任して最初に行ったのは、全職員へのインタビューです。どんな人がどんな気持ちで働いているのだろうという実態を知ることが最も重要だと思ったからです。私が理事長に就任した当時、大



山本 健慈 理事長

阪観光大学は民事再生の過程でありました。創立してからこれまでの歴史はありますが、前身の学校法人明浄学院から学校法人大阪観光大学として1法人1大学となり、ある意味でゼロからの出発でしたので、どうすれば働きやすい職場、大学にしていけることができるかというアプローチで、私立大学の経営に臨みました。そのような想いで臨んできましたので、苦勞しているなとか、大変だなと思ったことは全くありませんでした。ただ文科省の知り合いからは、「なぜそんな大学の

理事長を引き受けるのか。やめたほうがいい』と言われました。

私が大阪観光大学の理事長を引き受けた経緯を簡単に説明しますと、国立大学協会を2020年3月に退職して、もう仕事をしないという気持ちで帰ってきました。ただ、大阪観光大学の近くに自宅がありましたので、この大学のことは従前から知っていました。私の性分として、「目の前の大学が火を噴いているのに、知らないふりをするのもいかなものか。そういう理不尽なことが起こっている状況に対して、見て見ぬふりをするのは気持ちが悪い」という気持ちから理事長を引き受けました。「困っている学生や教職員がいるのに、私が何とも思わずに傍観している場合じゃないだろう」と思ったというだけの話です。

福山：しかし山本理事長は言わば落下傘のような形で理事長に就任されていますので、大阪観光大学の教職員からすれば山本理事長に対して斜に構えるところもあり、雰囲気的にやりづらい面もあったのではと想像するのですが、そのあたりはいかがだったのでしょうか。

山本理事長：私自身があまりそういうことを気にしない性格ということもあるのかもしれませんが、私が和歌山大学の学長に選出された時に、いろんな企業の経営者や経営幹部の方々にトップマネジメントを担うことについて聞いたところ、私が一番腑に落ちたのは、「会社のトップにもいろんなキャリアがある。技術系の人もいれば、財務系の人もいれば、庶務系の人もいます。トップになったからといってその会社の組織の各事業の全てが理解できるわけではない。自分が役員を選出するわけだから、自分の不得意なところは自分が信頼する役員に任せる。ではトップは何をするかと

いうと、その企業のミッションと理念を24時間365日伝え続けることだ』と言われたことです。個別の様々な事業については熟知している現場の人に任せる。そしてその責任は自分が取る。そういうスタイルであれば私にもできるし、私の性格に合っていると思って、学長だけでなくいろんなトップマネジメントを担ってきました。ですからこの大阪観光大学においても、とにかく現場が一番重要で、現場で皆さんがどんな想いでどんなことをやろうとしているかを知って、組織全体や、彼ら個人でやっていることが正しく評価されるようにしていくことが私の仕事だと思っています。様々な局面に遭うたびに、前の執行部や理事者への不信任などを抱いて、教職員が疑い深い姿勢になっているのではないかと思います。それは彼らの人生を理解するプロセスでもありますので、現在を知ることによって、私は彼らに何ができるのだろうかを考える。このことがこの大阪観光大学で私がやるべきことだと思っています。

福山：山本理事長は就任早々皆さんにインタビューされたということですが、それは教職員の方々と個別に1人ずつお話をされたのでしょうか。

山本理事長：教員については学長に任せていますので職員だけです。やはり大学は学長が前面に立つべきだと思っています。ですから教員への対応は教学サイドの長である学長に任せて、私は職員がどのような想いで働いているのかを知るために、40人くらいの職員に個別にインタビューしました。そうして感じたのは、やはり経営が大変でしたから嫌気がさして退職してしまった人が多くいたということです。しかし一方で、数字を追う成績主義

よりも、人に対する貢献をしたいと思う気持ちから、人を扱うサービスに生きがいを感じてこの大学に転職してきた人もいることが分かり、本学に残って働いている職員は、だからこそ学生に対しての面倒見がすごいのかと納得しました。私のこれまでの経験から、とにかくそこに関係する人たちが幸せになることが私にとっての幸せでもあると思っています。

福山：職員の方々との対話を通して今の状況を把握され、どうすれば学生や教職員が幸せになるのかを考えることができたということですね。

山本理事長：と言いますか、そのスタイルでしか私は物事にコミットできないのです。一緒に働いている人のことが分からなかったら、何をしてもいい分からないですし、私がどんな人間なのかを知ってもらわないと、言葉だけでは通じないというところがあるじゃないですか。同様に私の考えを書面にして掲出する、または公の場で話しているだけでは理解されないかもしれません。もしかしたら私を見ている人たちの中には、「国立大学で学長までやって、何か偉そうな人が来た」と思っている人もいたかもしれないですね。だからそういうことも含めて、職員とインタビューするということは、生身の私がどういう人間であるかということを知ってもらうチャンスでもありました。それが「対話」であり、信頼関係を構築するためには必要だったと思います。

福山：山本理事長のお気持ちの中では、国立大学と私立大学の雰囲気の違いを気にすることなく、与えられた環境下でトップとして経営を担われているということですね。

山本理事長：国大協で全国 86 の国立大学を全て見る経験もしていますので、同じ国立大学法人法という制度の下で運営していても、個々の大学は全く違うと実感していましたから、国立大学、私立大学という制度で分けけて物事を捉えるような考えは最初からなかったですね。そこで働いている教職員や学生たちがどうすれば幸せになるかということだけに関心があり、そのために自分は何ができるかということに常に考えていますので、国立大学と私立大学の風土の違いを意識したことはありません。

● 中期計画について

福山：貴学は 2022 年度に現在の学校法人大阪観光大学となったのを機に「大学憲章 2022」を制定し、建学の精神も“自由を共に楽しみ、社会を共に生きぬく”と一新しています。さらに「10 の約束」や「教職員行動指針」も合わせて制定しています。これらは山本理事長が企図して制定されたものなのでしょうか。

山本理事長：「大学憲章 2022」については山田良治学長が学問的理念に基づき、観光学の理論を大学論に昇華した、非常に素晴らしい憲章です。一方で「10 の約束」というのはいわゆる中期計画なのですが、私が理事長に就任する前に顧問であった 2020 年 12 月に中期計画を策定しようということを提案し、教職協働のワーキンググループを組成していろんな意見を出し合い、それをまとめたものです。2021 年 3 月時点では「9 つの約束」という暫定版を短期間で作成し、さらに時間をかけてブラッシュアップして、2022 年 4 月の新法人発足と同時に「10 の約束」に修正したものを公表しました。「教職員行動指針」は、中期計

画の策定中に、そのワーキンググループから行動指針を作りたいという意見が出て、作成されたものです。

福山：「教職員行動指針」は、「9の約束」の策定と並行して教職員の方々が自主的に作られたものなのですね。

山本理事長：以前の理事者が不祥事を起こしたのですが、自分たちも学生を裏切ってしまったという話が教職員たちから出て、きちんと自分たちを律するような指針を自分たちの手で作りたいと言ってきました。この「教職員行動指針」について、私は全く手を入れていません。

福山：中期計画である「10の約束」も「教職員行動指針」も、ボトムアップからの意見を中心に作成されたということですね。教職員の行動指針については、多くの場合理事長から作らないかと提案して、教職員の方々が「はい、分かりました」という形で作成するのが一般的なのかなと思うのですが、貴学の場合は教職員の方々が「自分たちで作りたい」と自発的に作成したということには驚きです。確かに一度民事再生となりましたが、山本理事長が就任されてからは、職員の方々のモチベーションは高まっており、仕事に前向きになっているように感じます。なぜ、教職員の方々はそのように前向きな姿勢に変わったのでしょうか。

山本理事長：多くの人が前向きに変わったのは確かだと思いますが、みんなでワッと一斉にやる必要はないと思います。やりたいと思う人が飛び出せる、そのように表現できる環境を作ることができればいいと思っています。全員がそう思っていたわけではないですし、後ろ向きの人や冷ややかに見ている人もいた

かもしれません。ですが、何かをやりたいという積極的な人が足を引っ張られないような環境を作ることが重要なのだと思います。この事態をアクティブに乗り切りたいと思っている人はどこにでもいるわけで、その人たちが飛び出して来られるような環境を作ることが重要です。だからといって、消極的な姿勢にいる人を馬鹿にすることも否定的な評価をすることはありません。人生にはいろんな局面がありますから、常に積極的である必要もないですし、怠けているからダメだという評価をする必要もないというのが私の考えです。その時々には飛び出して来る人が足を引っ張られないような環境を作るというメッセージを常に送り続けるというのが私の考えで、私自身が積極的に何かの仕掛けをしているということはありません。

福山：前述の職員へのインタビューの実施、そして「10の約束」や「教職員行動指針」のお話を伺いますと、職員の方々からすると経営のトップである理事長との話し合いを通してお互いを理解し合っているからこそ、うまく機能しているのかと感じ、やはり“対話”が大学経営の要諦なのかと思いました。

山本理事長：スローガンのように“参加と対話”ですね。参加できない他者の決定に従いたいと思う人はいないのではないのでしょうか。やはり自分で考えて動いてほしい。中期計画もそうです。自分の想いや人生をかけてこの職場にいるわけですから、自分の人生が投影できない時間なんて使いたくないですよ。ですから「教職員行動指針」の内容は、教職員の方々がこうありたいと常に考えていたことなのではないのでしょうか。一方で、中期計画の実質化に関しては、定量的、定性的な評価

にはまだ至っていないと思います。とにかく厳しい経営状況でしたから、1年1年を何とか過ごしている感じですので。しかし2027年度からは新しい中期計画に移行して実施する予定ですので、外部コンサルを交えて、今年1年かけて計画作りに着手しています。私からは、次期中期計画は、とにかく教職員が参加するような計画にしてほしいという要望を出しています。

福山：次期中期計画はKPI（Key Performance Indicator；重要業績評価指標）などの数値目標をもっと明確にしたような形式になるのでしょうか。

山本理事長：文科省的には「KPIを設定した事業計画」となるのですが、KPIに惑わされることなく、自分の本当の目標を保持してほしいと常々言っています。和歌山大学や国大協にいた時から、私は文科省に対して、「ひたすらKPIを追い求めるような消耗戦みたいなことはやりません」と直接言っていました。ただ中期計画の体裁を整え、ある程度の定量評価を行うためにKPIを設定しますが、KPI達成のみに固執せずにもっと大局的な視点で大学経営を行う必要があると思っています。ですから、KPIを追求するような消耗戦ではなく、本質的に教職員全員をエンパワーメントして仕事ぶりを発揮できるような中期計画にしてほしいと思っています。目標となる地図だけは全員が共有し、その地図の中で自分の人生の物語を作してほしいという感じです。

● リーダーシップについて

福山：山本理事長が考えるリーダーシップとは、先ほど述べられたように“参加と対話”という形で、みんなをどうやって参加させるか、

そしてそのためにどういう考えを持っているのかを明らかにし、対話を通してみんなで目標を作り上げていく、みんなを巻き込んでいくようなリーダーシップに努められているということでしょうか。

山本理事長：企業もそうだと思いますが、これだけ複雑化した組織が一人のリーダーシップで動くというのは正常ではないと思います。構成員から多彩なアイデアが集まってくるようなリーダーシップでないといけません。本学の建学の精神である大学憲章は、理念であり大きな目標であって、その目標を達成するためにはいろんなセクターのリーダーシップが必要となるわけです。“コーディネーター型マネジメント”のような、いろんなセクターのアイデアを組み合わせ一つの世界の中に収めて、物語にして説明できるようにすることが本当のリーダーシップであり、今、本学において必要なリーダーシップではないかと思っています。

福山：最初におっしゃったように、それぞれの得意分野の人、信頼できる人に一任して、常に理念とミッションを考え、あるべき目標に向かって導く。そのためには皆さんが参加し、議論をして考えを共有させていくというリーダーシップが必要なのですね。

山本理事長：現場を一番よく知っている人が考えて、「今、これをやるのがベストだ」ということ以上に、私の考えは及ばないですから。ただ先ほどのたとえで言えば、どういう地図にするかは常に議論していますから、みんなが共有している地図上での現在のポジショニングにおいて、「だからこうするのが良い」という判断も共有できています。そのうえで最後、仮に失敗した場合は理事長である私が責

任を取ればいいと思っています。

また高等教育の状況については政策も含めて日々刻々と変化していますので、情報は常に発信するように心掛けています。学長や教
学の執行部には伝えるようにしていますが、私が直接アイデアを出して「こうしよう」と言うことはありません。やるかやらないかは現場の人の判断ですから。

福山：現場でできるかできないかの判断については、トップダウンで押し付けるのではなく、ヒト・モノ・カネの問題もありますので、情報提供に留めて現場の判断に任せるということですね。

山本理事長：私が直接やるわけではありませんから、教職員間でとにかく、やる気になってもらわなければ何もできません。やる気になってくれば、金銭面を含めた条件整備はいろいろな算段ができると思います。まずはその方向に自分もやりたいと思う人がいるということが重要なのであり、やろうという人がいないと何もできませんし、何も進みません。

福山：だからこそ、対話が必要であり参加が必要であるということですね。山本理事長がリーダーシップを発揮するに際して、トップマネジメントを担う理事長としては、どのような経営姿勢で臨んでおられるのでしょうか。

山本理事長：私学は“私”と書いていますが、“公共財”だと認識することです。本学で言えば、1921年に明浄高等女学校からスタートしています。明浄高等女学校は商人の女子の中等教育機関として設立され、100年間、大阪市民が投資して作った公共財なのです。創設者が掲げた建学の精神は大変崇高な理念であり、それに沿った教育を行っているのですが、授業料を払った市民が脈々と築いた公共財と

も言えるのです。その公共財をどのように未来に活かしていくのかという使命感が理事長には必要なのではないでしょうか。未来において地域の高等教育機関をこの地域に存続させていくという強い使命感を持たなければ大学経営はできないと思います。今があるのは、創設してからこの学校に学生生徒を入学させるという投資をし続けた市民の財産、つまり公共財というわけなのです。

福山：地域の教育を担う公共財なのだという考えを持ち、未来に向けて経営を行うという強い気持ちが必要だということですね。

山本理事長：繰り返しですが、私はこの大阪観光大学を公共財として、この地域にもっと活かす価値があると思っているからこそ理事長職をやっています。大阪市民・府民が築いた公共財を安易に潰すのは、日本の未来にとって絶対に良くないという想いで、日々経営に臨んでいます。私立大学の経営については、国の政策が変われば、小規模私立大学が存続し、地域の高等教育機関として利活用できる手立ては十分にあると思いますが、現実には兵糧攻めに晒されていると言いますか、財務省の官僚は高等教育のことを全く考えておらず、競争こそが成長や発展を生むというマインドで、競争して勝つことが自分の良い人生を描くことだと思っています。財務省のトレンドは、「私立大学は数が多く、整理が必要なのとにかく潰れてくれ」という方針です。そうすると当然に小規模な大学や財政基盤の弱い大学から淘汰されていくことになります。しかし地域の私立大学がなくなり、その地域で高等教育を受ける機会がなくなるということは文科省の本意ではありませんから、プラットフォームや連携、共同を推奨し、個別の大

学には補助金を出さないけれども、連携や共同をした大学には補助を行うということになっています。そうなってくると、法人合併は別の話ですが、この地域で例えば本学の観光学の教育を近隣の大学が連携して、または共同で作ろうという考えも出てきますし、一大学の事情だけでなく、私学が公共財として、公共の利益のためにどのように地域に貢献していくのかという観点からも、あらゆる選択肢を想定する必要があるだろうと思います。

さらに、学術や学術を研究する人に対するリスペクトがない人は、“大学”の経営者である理事長をやるべきではありません。学術に対するリスペクトの気持ちがあれば、アカデミズムキャリアの人であっても、ビジネスキャリアの人であっても、どのようなキャリアの人であっても理事長にふさわしいと思います。この考えは学長職にも共通して言えます。教学を統治するためにはやはり他の人の学問にも関心を持ち、学長も学内の研究者に対するリスペクトを持つ関係が必要です。そのような学長でないと学内の管理運営は難しいと思います。

福山：理事長としてのリーダーシップや経営姿勢だけでなく、学長の経営姿勢のお話は参考になりました。やはり教育研究活動が大学の本来的な活動であるという考えが基盤にあったうえでの経営であるということですね。

● 財務について

福山：貴学の事業報告書や決算書を見ますと、最近は入学定員を超える入学者数となっていますし、財務面も教育活動資金収支差額や経常収支差額がプラスになっていることから、財政基盤は安定化しつつあると思います。予

算や決算を含めて財務状況について教職員の方々に説明される機会はあるのでしょうか。

山本理事長：説明会については、民事再生時に管財人が教職員に直接対話するスタイルで年に複数回実施していたことを私も見ていますので、これを継続して年3回程の説明会を教職員が一堂に会する形で行っています。説明会は財務状況だけではなく、いろいろな事業計画全体についても説明しています。

本学は、私学事業団の経営判断指標で上から3つ目の「A3」（正常状態）になりました。説明会においては、この「A3」というのはどういう意味を持つのか、これから事業計画を遂行していくに際して、例えば事業を維持発展させるために融資を受ける場合や学校法人間での連携共同事業を展開する場合など、本学が健全な経営体質でなければ相手にされません。ですから、「大学の事業継続のためには、A3の区分を死守しなければ、経営の統廃合を含めて淘汰されるおそれがあります」ということも説明しようかと思っています。

福山：教職員向けの説明会において、経営判断指標で「A3」を死守すべきであり、その理由も説明されることは、教職員が貴学の経営に参加するという意味では重要だと思います。事業報告書には、文科省の経営指導法人から外れることになったとも記載されていましたが…。

山本理事長：2022年度に新たな法人としてスタートした時に、大学経営が正常化し、決算内容も大きく改善しましたので、2023年3月に文科省から経営指導法人の指定から外す旨の通知が届きました。

福山：事業計画がきちんと実行されたからこそ経営改善であり、まさに山本理事長が提唱

される“参加と対話”の経営スタイルが早々に教職員に浸透して一丸となって取り組んだからこそ、経営指導法人の指定が解除されたのだと思います。

● 大学の将来構想について

福山：先ほどの私立大学を公共財として発展させていくという考えも含めて、山本理事長は大阪観光大学の将来構想についてどのような考えをお持ちでしょうか。

山本理事長：大阪府南部には大学が少ないので、地域の高等教育をどのように守っていくかということと、観光学の教育研究を高い水準で維持発展させるために本学には何ができるかというのが、将来の大阪観光大学を含めた地域の大学発展の鍵となると思っています。

福山：大学単体ではなく、地域を巻き込む、あるいは大学間連携など、広い視野で大阪観光大学を含めて、地域の大学全体を発展させていくということですね。

山本理事長：「日本のような小さい国が学術教育を高い水準で行うためには共同の思想が重要である。しかし今の国立大学の学長は個別大学の競争に追われてしまい、そういう考え方を十分持っていないのでは」という元国立天文台長の海部宣男先生のお話に共感するところがあります。それは国立大学だけの問題ではなく、600以上の私立大学についても同様です。私立大学であっても、まさに公共財として、共同の利益を実現するような構想を持つ必要があると思っています。

福山：山本理事長の公共財としての大学というお考えは、大所高所から、国立大学や私立大学の設置形態を問わず、日本の大学の使命を改めて考える示唆を与えていただいたと思い

ます。本日はお忙しい中お時間をいただき、大変ありがとうございました。

● インタビューを終えて

山本理事長は、インタビューでも触れておられますように、文部科学省など周囲からの反対の意見を押し切り、困っている学生や教職員を見て見ぬふりをするのは気持ちが悪いという思いから、民事再生手続き中であった大阪観光大学の理事長に就任されています。周囲の反対を押し切ってまで理事長を引き受けた理由は、“大学は公共財であり、この大阪府南部の人々が育てた高等教育機関を絶やしてはいけない”という山本理事長の揺るぎない信念によるものであることを言葉の端々から感じることができました。一見簡単そうな決断に聞こえるかもしれませんが、このお話を聞いている最中、翻って私自身に置き換えて考えてみると、仮に私自身が困っている大学から協力してほしいと要請を受けた場合、山本理事長のように看過することなく、一緒になって経営再建のために尽力しようと思うことができるのだろうか、引き受けた後、倒産したらどうしようという不安の方が勝り、結局は看過してしまうのではという気持ちになっていたことも事実です。インタビュー冒頭に山本理事長のこの揺るぎない信念に触れることで、私自身の気持ちも徐々に高揚していったことが今でも記憶に残っています。

また理事長に就任した当時の大阪観光大学においては、このような危機的な状況だからこそ、トップである理事長が率先垂範で自ら考えを示し、行動していくという強いリーダーシップを発揮するものと思いきや、これまでのトップマネジメントの経験から培ってきた“参加と対話”の経営スタイルにより、現場の教職員、とりわ

け職員の主体性を重視し、ご自身は情報提供に留めて教職員のやる気を起こさせ、実際に教職員が主体的に行動していることが印象的でした。その一例が本インタビューで触れている「教職員行動指針」の作成・公表です。

さらに山本理事長は、和歌山大学学長を経て就任された国立大学協会の専務理事の時に文部科学省だけでなく財務省とも折衝していた経験から、国立私立という設置形態を超えて、日本の高等教育を全国レベルだけでなく地域レベルにおいても発展させなければならないという強い信念も持ち合わせており、現在の財務省の私立大学削減という考えを憂いていることも非常に印象的でした。確かに競争によって成長することも大事ですが、競争だけに終始せずに関心や関心のあることなど多様な経験を通して成長することも大事であり、多様な考えを持った学生を受け入れ、そして学生個々人の十分な成長に寄与するべく、それぞれの地域において特色をもった教育や研究を行う大学は、そのような多様な学生の成長を促進する受け皿として必要なのだというこも、大学人として改めて思っ

た次第です。このような“あるべき大学”の本質を想起させられるのも、山本理事長の大所高所からの大学への想いを述べられたからこそと感じます。

そしてインタビュー後の帰路、改めて困っている大学から協力してほしいと要請があった場合には一緒になって経営再建のために尽力しなければならないと私自身の気持ちに変容したことからも、山本理事長の大学への想いは、語り口は温厚ではありますが相当に熱いものを感じ取ることでき、それは良い意味で伝播するものと確信した次第です。これは山本理事長が全くの自然体でふるまいつつも、知らず知らずのうちに正しい方向に導くリーダーシップを遺憾なく発揮していることから派生するものなのかもしれません。

地域とともに発展していく公共財としての大学への熱い想いで経営に尽力されている山本理事長の下で、大阪観光大学は財政基盤をさらに拡充して、大阪府南部において欠くことのできない、地域に資する大学として、ますます発展していくものと実感しました。 ■■

インタビュー募集

本誌では、学校法人（大学）経営についてインタビューを受けてくださる理事長先生を募集しています。日時相談の上、インタビュアー（福山氏）が全国へお伺いいたします。インタビュー時間は1時間程度、掲載後に薄謝を差し上げます。NPO 法人学校経理研究会・岡崎までご連絡ください。

MAIL okazaki@keiriken.net

学校法人大阪観光大学について

学校法人大阪観光大学は、1921（大正 10）年 4 月に大阪府大阪市阿倍野区に前身である「明浄高等女学校」を開校したことから始まり、その後 1985（昭和 60）年 4 月に大阪府泉南郡熊取町に「大阪明浄女子短期大学」を開学、2000（平成 12）年 4 月には短期大学と共用敷地に男女共学の「大阪明浄大学」を開学するなど、時代とともに学校法人も発展してきました。そして 2006（平成 18）年 4 月に大阪明浄大学から「大阪観光大学」に大学名称を変更し、2022（令和 4）年 4 月に新たな寄附行為のもと、学校法人大阪観光大学に法人名称を変更し、現在に至っています。

学校法人大阪観光大学は 2022 年 4 月より、一法人一大学の学校法人として再出発することとなり、自由を基本コンセプトとして、観光学と観光教育の発展に連なる「大阪観光大学憲章 2022」を新たに制定し、“自由を共に楽しみ、社会を共に生きぬく”という新たな建学の精神の下で、名実ともに観光学と観光教育の発展に目的を特化した高等教育機関としての社会的使命を明確に打ち出しています。

2025 年 5 月 1 日現在、大阪観光大学は 2 学部 2 学科であり、収容定員 800 人のところ、学生数は 810 人となっております。

【設置校】

○大阪観光大学

- ・観光学部
観光学科
- ・国際交流学部（学生募集停止中）
国際交流学科

【法人本部】

学校法人大阪観光大学

〒590-0493

大阪府泉南郡熊取町大久保南 5-3-1

URL <https://www.tourism.ac.jp/hojin/>

